



ハンドボール競技における戦術的行動の 実態に関する評価 —フェイントに着目して—

栗山雅倫 (体育学部競技スポーツ学科)

An Evaluation of an Actual Condition of Tactical Movements in Handball
— A Practical Use of a Feint Movement —

Masamichi KURIYAMA



Abstract

The purpose of this study was to research the actual condition of tactical movement, especially practical use of a feint, in order to consider a better game construction. A feint has been considered as a basic element of tactical and/or technical standpoint. However, it has not been declared the actual condition of practical use of a feint. On the other hand, many precede researches showed the effective way of moving of a feint. It is obvious having ideas of better use method of feint is to develop handball game, because a feint has become more important element of a handball game.

Conclusion of this study was follows.

1. An actual condition of practical use of feint has been different among teams.
2. It can be seen that a game performance is influenced by a practical use of a feint.
3. It is effective to consider a better condition of the practical use method of a feint tactically.

(Tokai J. Sports Med. Sci. No. 24, 33-38, 2012)

I. 緒 言

ハンドボール競技におけるパフォーマンスを決する要因として、戦術的能力は極めて重要な位置づけがなされている。松脂の使用などにより、ボールの操作性が容易であることや、ボールを保持しながら動ける歩数が多いことは、ハンドボール競技における技術の幅の拡大につながっているが、幅広い技術が故に、それぞれの状況におけ

る、技術の選択に関する判断、またはそれらを遂行する能力は、極めて重要である。

例えば、防御プレーヤーがゴールに近い位置でポジションをとる場合、攻撃側の選択肢は、防御の前からロングシュートを狙う選択肢がとられることが妥当であろうし、防御者間の間隔が広ければ、突破を試みるのが妥当といえる。このように、ハンドボール競技では、絶えず状況に応じてプレーを選択することが求められ、その判断能力がパフォーマンス能力を決することは、まぎれも

ない事実である。

相手を欺瞞する動作から突破を試みることを指す“フェイント”は、ハンドボール競技において頻繁に見られる技術であり、より良い得点シーンを確保するための、重要な戦術的選択肢の一つである。フェイントに優れたプレーヤーは、チーム戦術の中で、あるいは個人の戦術の中で、防御を突破し、より多くの有利な得点シーンを創り出すことができる。韓国は、1988年のソウルオリンピックにて、女子代表チームが世界を制し、男子代表チームが準優勝に輝いたが、その戦術的な特徴として、精度の高いフェイントの多用が注目を浴びた。近年は、全世界のあらゆるカテゴリーのゲームにおいて、フェイントを見ないゲームはない。フェイントは一般的かつ需要の高い技術であり、したがってフェイント動作の習熟は、ハンドボール競技者のトレーニングにおいて、一般的にも重要視されている。

前述した理由から、フェイントの種類や、フェイントの動作効率について言及した先行研究¹⁻³⁾は散見される。しかしながら、フェイントが使われるべき場面に関する考察や、フェイントの使われる実態に関する調査は見られない。

フェイントの出現に関する調査を実施することは、ハンドボール競技におけるフェイント技術への依存度を明らかにすることに繋がり、フェイントを使うべき機会の検討や、その際の有効なフェイント動作の仕方について検討する、基礎的資料となり得ることが考えられる。

Ⅱ. 研究目的

ハンドボール競技におけるフェイント出現の実態を調査し、フェイントへの依存度、フェイントのゲームへの貢献を明らかにすることで、より有効なフェイントの活用について検討する一資料とすることを、本研究の目的とした。

Ⅲ. 研究方法

ハンドボール競技の公式戦映像より、フェイントの出現数を調査し、得られたデータの検討より、考察を展開した。

1. 調査対象

東海大学「人を対象とする研究」に関する倫理委員会の承認を得て、調査対象を選定した。

2012年度関東学生ハンドボール秋季リーグ女子一部、全8チームによって行われた全28試合より、ゾーン防御システムである6-0防御システムに対峙する各チーム1試合、のべ8ゲームを抜粋し、調査の対象とした。

2. 調査項目

フェイント動作を、“1対1状況において、防御プレーヤーを欺瞞し、突破を試みる一連の動作”と定義し、セット攻撃局面における出現と成否について、以下の通り調査した。なお、セット攻撃局面とは、ボール所有権獲得から得点・ミス・オフフェンスファウルによる所有権の喪失までの攻撃機会の中で、相手防御側コートにおいて、ポジションを固定してから始める局面を指した。したがって速攻による攻撃やスローオフ直後の速攻は調査の対象外とした。

1) フェイントの出現

フェイントの出現について、以下の図1に示す分類で、それぞれの状況における出現回数をカウントした。分類の定義は、攻撃のきっかけ（Opening）を目的として、初期的なポジションにおけるフェイント、同じ目的で用いられるが、初期的なポ

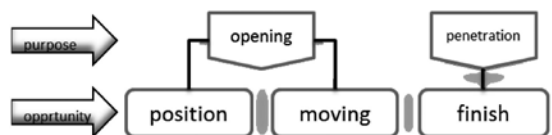


図1 フェイント分類
Fig. 1 Classification of feint

ジションから移動した後に試みられるフェイント、さらに防御ラインの突破（penetration）を目的とし、攻撃のフィニッシュに用いられるフェイントに分類した。

2) フェイントの成否

それぞれのフェイントについて、その成否についてカウントした。なお、フェイントの成功の評価として、フェイントした攻撃プレイヤーをマークする防御をかわし、マークされない状態になり、シュートが放てたか、もしくは味方にパスを展開できたこととした。

3) フェイントの出現頻度

フェイントの出現頻度を評価するため、以下の式で算出した値を“フェイント出現指数”とし、各チームのものを求めた。フェイント出現指数＝フェイント出現回数／セット攻撃回数

4) フェイントの成功率

フェイント成功回数をフェイント出現回数で除したものをフェイントの成功率とし、チームごとのものを算出した。

5) パフォーマンス結果の評価

フェイントの出現及びフェイント成功率が、ゲームに及ぼす影響を検討するために、以下のパフォーマンス結果を調査した。

(1) 順位

チームパフォーマンスレベルの総合的な評価として、調査対象とした2011年度関東学生ハンドボールリーグ秋季リーグ女子一部の順位を調査した。

(2) 攻撃成功率

セット攻撃による得点をセット攻撃回数で除したものを攻撃成功率とし、チームごとのものを算出した。

(3) ミス出現率

シュートに至らずにボール所有権を失った攻撃をミスとし、セット攻撃局面におけるミス数をセ

ット攻撃回数で除したものをミス出現率として、チームごとのものを算出した。

3. 統計処理

フェイント出現についてチーム間の相違を評価するために、一元配置の分散分析を用い、統計学的処理を行った。

IV. 結 果

1. フェイントの出現

1) フェイントの出現数

図2に状況別のフェイントの出現数について示した。なお、フェイントは、図1の定義にしたがい、フェイント機会の別に、きっかけ目的段階における“position”“moving”、突破目的段階における“finish”に分類した。

図2より、フェイントの活用形態は、チーム間で多様な相違があることがうかがえる。また、チーム名AからHの順で、秋季リーグの順位を表しているが、順位と出現数の間に、関係性は認められなかった。

2) フェイントの出現頻度

図3にフェイントの出現頻度を示した。なお、出現頻度とは、一回のセット攻撃における、フェイントの出現した平均値を示している。

図2同様、チームAからHの順で、秋季リーグの順位を表しているが、順位と出現頻度に関係

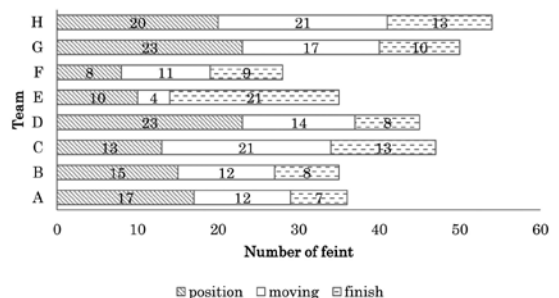


図2 フェイントの出現数
Fig. 2 Appearance of feint

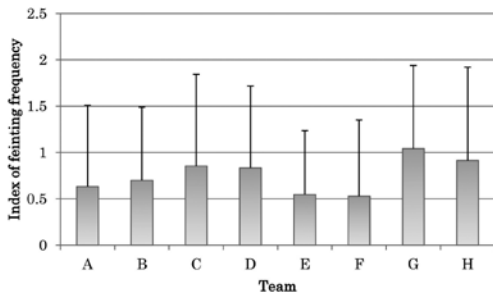


図3 フェイントの出現頻度
Fig. 3 Frequency of feint

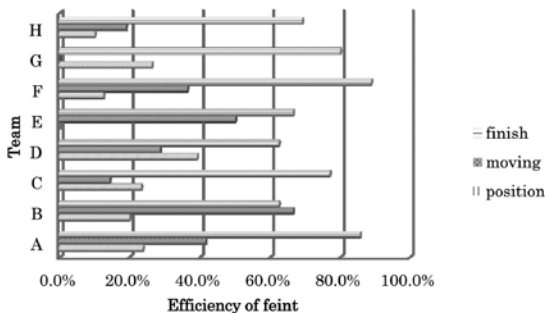


図4 フェイントの成功率
Fig. 4 Efficiency of feint

性は見られなかった。また、チーム間に出現頻度の違いは見られるものの、統計学的有意差は認められなかった。

2. フェイントの成否

図4に状況別のフェイントの成否について示した。

8チーム中7チームにおいて、finishにおけるフェイントの成功確率が最も高い値を示した。すなわち攻撃の完了にフェイントを選択することが、成功確率を高めることを示唆している。

また、finishにおいてフェイントが使われた場合の全チームのフェイント成功確率の平均と標準偏差は $74.1 \pm 10.3\%$ であり、攻撃のきっかけとしてポジションが変化しない段階でフェイントをした場合（position）が、 $19.3 \pm 11.8\%$ 、同じく攻撃のきっかけとしてポジションを移動してからフェイントをした場合（moving）で、 $32.1 \pm 21.2\%$ となった。

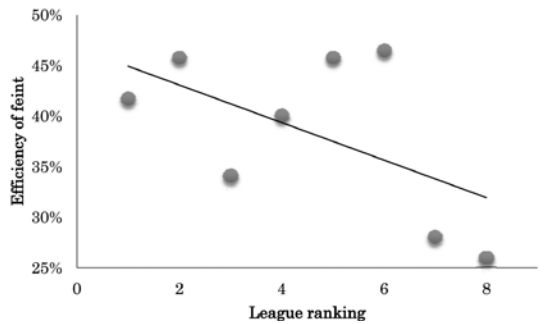


図5 フェイント成功率とリーグ順位の関係
Fig. 5 Relationship between feinting efficiency and ranking of the league

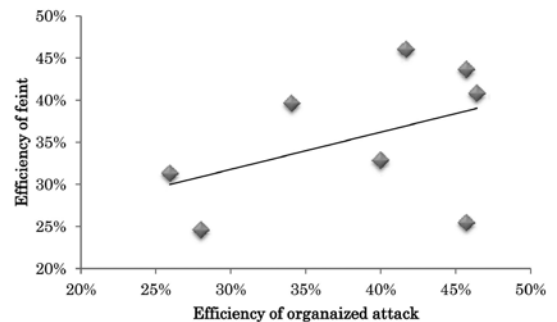


図6 フェイント成功率とセット攻撃成功率の関係
Fig. 6 Relationship between feinting efficiency and efficiency of organized attack

3. フェイントの出現及び成功率とパフォーマンスの関係

図5に、フェイントの成功率と順位との関係性を示した。相関係数は -0.56 であり、中位の負の相関を示した。

図6は、フェイントの成功率とセット攻撃の成功率を示した。相関係数は 0.44 となり、中位の正の相関を示した。

これらから、フェイントの成功率が緩やかながら、ゲーム全体のパフォーマンス結果に影響を及ぼしていることがうかがえる。

さらに、図1に示したフェイントの種別には、突破目的段階のフェイント（finish）では、出現率とセット攻撃成功率の間に、 $r=0.48$ と中位の正の相関がみられ、フェイント成功率セット攻撃成功率との間に、 $r=0.43$ と中位の正の相関が見られた。

図7は、きっかけ目的段階のフェイント（position

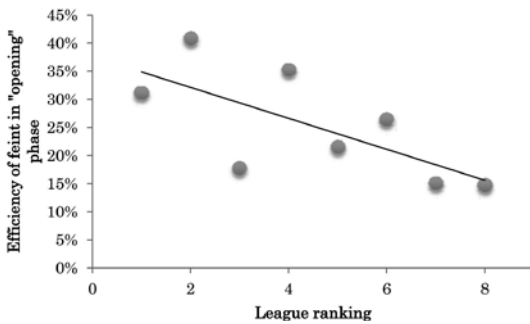


図7 攻撃きっかけ段階のフェイント成功率とリーグ順位の関係
Fig. 7 Relationship between feinting efficiency in the "opening" phase and ranking of the league

+moving) の成功率と、順位の関係を示した。 $r = -0.69$ と高い負の相関が見られ、攻撃を優位に展開するきっかけとして、フェイントを有効に使うことは、ゲームパフォーマンスの結果に影響を及ぼす可能性があることを示した。

セット攻撃におけるミス出現率とパフォーマンスの関係においては、顕著な相関が見られなかった。

V. 考 察

1. フェイント出現傾向の実態に関して

ハンドボール競技において頻繁に使われるフェイントについて、大西⁴⁾は攻撃の個人的技術であるとし、Ioan Kunst⁵⁾やZoltan Marczinka⁶⁾は重要かつ基本となる個人戦術であると述べている。またIoan Kunst⁵⁾は「フェイントの乱用は、ゲームの流動性を損なうひとつの要因である」と言及している。これは、適宜、状況に応じてフェイントを試行すべきであることを示唆しているが、一般的にも同様に解釈されている。しかしながら、フェイントの試行される実態についての調査は見られない。

本研究の調査では、チームによってフェイントの活用形態が大きく異なることが明らかになった。今回は大学の女子チームのみを調査対象とし、同じ防御システムに対峙する8チーム各1試合からデータを得たが、それぞれの局面にての出

現数は大きく異なっていた。各チームは、それぞれに異なる攻撃のコンセプトや、ゲーム像を抱いていることが推測できるため、フェイントが試行される局面の出現数にも相違があることは十分に考えられる。しかしながら、本調査結果による、チームによって極めて大きな相違を示す活用傾向が示唆することは、近現代のハンドボールの競技場面では、フェイントを活用すべき局面について、未整備の状態であることも考えられる。

図2のフェイント出現頻度の比較より、1回のセット攻撃における出現頻度は、各チーム間に相違が見られはしたが、フェイントを活用する機会は、活用頻度の少ないチームにおいても、セット攻撃2回のうち、1回はフェイントを活用することが示された。実態として、これほどまでに多用されるフェイントは、活用される場面について十分検討すべきことが、競技力の改善につながる可能性が考えられる。

2. フェイントの成功の環境要因に関する検討

図4に、フェイントの成否と活用される局面との関係を示した。各チーム“finish”の局面で活用されるフェイントが、成功率が高いことが明らかになった。しかしながら、図1に示したように、必ずしも“finish”の局面にフェイントが多用されていないことがうかがえる。“finish”の局面であっても、フェイントを活用することが、必ずしも得点シーンに結びつく最良の選択肢で無いことは考えられるが、フェイント成功率の極めて局面を有するチームにおいても、図1にあるように“finish”以外の局面で、フェイントを多用していることは、フェイントを活用すべき状況の整理が不十分であることが考えられる。

3. フェイントの状況別の成功率とパフォーマンスの関係について

図5、図6より、フェイントの成功率と、ゲームにおけるパフォーマンス結果に相関がある可能性があることが示唆された。ここから、活用される頻度の高いフェイントが精度高く施行されるべ

きであることがうかがえるが、そのためには、前述したようにフェイントを活用すべきシーンの整理が不可欠であることが考えられる。

図7では、フェイント成功率の低い、きっかけ目的の局面におけるフェイント成功率とパフォーマンスの間に相関が見られることを示している。フェイントを攻撃のきっかけとして活用する場合、必ずしも成功率が高くないという結果と、その局面でのフェイントの活用状況が悪いほど、パフォーマンスに悪影響を及ぼしているといった実態から、きっかけ目的の局面における、フェイントの活用形態を整備すべきことで、パフォーマンス改善に良い影響を及ぼす可能性があることが推察できる。

図4は、“position”におけるフェイントが、成功率を低いことを示しており、この状況でのフェイントを回避することが提案でき、図7の示すように、この状況におけるフェイント成功率がパフォーマンス結果に影響することから、フェイントをかけるべき条件を整理すべきことが提案できる。“moving”におけるフェイントは、“position”におけるフェイントほど、成功率は低くないものの、高い成功率とは言えない実態であることから、“position”におけるフェイントの活用条件と同様、十分に検討されることが、ゲームパフォーマンスへの好影響を促進することにつながると考えられる。

VI. まとめ

フェイントの動作に関する解析や、有効な行動パターンに関する考察が有益であることは、疑う余地はない。しかしながら、本研究における調査や考察が示すように、フェイントを活用する条件を検討することが、ゲームパフォーマンスの改善につながることも、同様に重要であることと考えられる。

本研究では、限られた調査対象から考察を進めたが、あらゆるカテゴリーにおいて、同様の調査及び研究がなされることは、極めて意義の高いことと思われ、今後の課題としたい。

参考・引用文献

- 1) 加古川己由紀, ハンドボール選手のフェイント動作に関する研究, 豊田工業高等専門学校研究紀要, 第28号, pp143-148, 1995.
- 2) 池田修, ハンドボールのフェイント動作に関する運動学的研究, 日本体育学会大会号, 第27号, pp484, 1976.
- 3) 大西武三, 江田昌佑, 水上一, 河村レイ子, ハンドボール競技における1対1の突破に関する研究, 日本体育学会大会号, 第33号, pp616, 1982.
- 4) 大西武三, ハンドボール指導教本, 大修館書店, pp54-55, 1996.
- 5) Ioan kunst, ハンドボールの技術と戦術, ベースボール・マガジン社, pp151-152, 1981.
- 6) Zoltan Marczinka, PLAYING HANDBALL, TRIO BUDAPEST, pp113-122, 1993.